

問 国  
題 語  
用 紙

組 ・ 番号	氏 名
1年 組 番	男女

次の文章について、後の(1)～(5)の問いに答えなさい。

まずは――①あいつがぼくの前に姿をあらわす直前の話から。

カッコつけて、じらすつもりはないけど、『ゴジラ』だって物語の最初からドーンと登場するわけじゃない。あっさり顔を出すのはただの脇役で、主役はたっぷり時間をかけて、じわじわ、じわじわ、じわじわ……と登場する。

あいつもそうだった。

ゴジラみたいに――なんて言うと、あいつ、絶対に怒ると思うけど。

あいつのウワサを初めて聞いたのは、三日前の夜だった。

会社から帰ってきたパパが、「ツヨシの学校に転入生が来るかもしれないぞ」と、ぼくに言った。

②最初は信じなかった。「はいはいはい、そーですか」なんて、笑ってごはんを食べていた。

だって、そうだろ？ 学校の話のパパが知ってるのっておかしいし、となり町にあるオモチヤ会社で新商品の開発をしているパパは、自分では「研究者なんだ、科学者なんだぞ」といばっているけど、「いまタイムマシンをつくってるからな」「子ども用のロケットができたら、ツヨシがパイロット第一号だぞ」って、ガキっぽいウソばかりついている。

だから、あいつの話もただのジョーダンだと思ってた。春休みでたいくつしてるぼくを盛り上げるため……って、もうちょっと面白い話、してくれなきゃ。

「あ、ツヨシ、信じてないな」

「うん」

「ほんとなんだよ、ほんと。パパの古い友達の子どもなんだ。いままで東京にいたんだけど、四月からお母さんと二人で引っ越してくるんだ」

あれ――？

「お母さんと二人で」ってことは、お父さんは……。

ぼくの疑問を見抜いたパパは、ちよつとさびしそうな顔になって言った。「その子のお父さん、病気で亡くなったんだ、もうだいたいぶ前に。ヒロカズっていつ、いいヤツだったんだけどなあ」

メガネの奥の目が、ほんのりと赤くなった。パパはおとなのくせに泣き虫で、NHKの大河ドラマの最終回では、必ず泣いてしまう。

「男の子なの？ その子」とママがきくと、パパは③をかしげて、

「それがよくわかんないんだ」と言った。パバも、ヒロカズさんの子どものごときは、(赤ちゃん)が生まれました」という昔の年賀状でしか知らないらしい。

「息子か娘かも書いてなかったんだから、まいっちゃうよ。でも、ツヨシと同じ年なんだなって思ったのはおぼえてるから」

ってことは、ぼくと同級生――四月から四年生になる。

「名前は何？」と、ぼくがきいた。

「マコトっていったかな」

「じゃあ男の子でしょ」とママは言って、ぼくを振り向いた。

「ツヨシ、マコトくんと仲良くしてあげなさいね」

言われなくても、そうする。転入生をむかえるのは小学校に入ってから初めてのことだし、四年生に進級するときはクラス替えがないから正直つまんなかったし、たぶんぼくは一学期のクラス委員になると思うし、それに、やっぱり……転入生って、面白そうだし。

次にあいつのウワサを聞いたのは、二日前、つまり、おとこのことだ。サッカーの練習にやってきた同級生のタッチが、「おい、すげーよ！ すげーのを見ちゃったよ！」と言った。

熊野神社の境内のカシの木に登ってる子どもがいたらしい。しかも、下から数えて七番めの、六年生でも登れる子はほとんどいない高い枝に立つて、町を気持ちよさそうに眺めていた、という。

④ だった。

体はそれほど大きくなかったから、ぼくたちと同じ年ぐらい。

マコトくん――かも。

「どんなヤツだったの？」とみんながきくと、タッチは頭のでっぺんの髪の毛をつまんだ。

「チョンマゲみたいになった、こここのところが」

「はあーっ？」

「ほんとだよ、ほんと。髪の毛の長さはふうなんだけど、こここのところだけ、チョンマゲみたいになるんだ」

マコトくんって……サムライなんだろうか……。

三度めのウワサは、昨日、きいた。教えてくれたのは、クラスでいちばん体の大きなジャンボだった。

何日前にお母さんと一緒に商店街に買い物に行ったら、見かけない顔の子が一輪車に乗っていたんだという。

「なんか、一軒一軒お店をチェックするみたいいきよるきよるしてたんだけど、すつごううまいんだよ、一輪車こぐのが」

サーカスみたいだった。サーッと走ってピタッと止まり、クルッとターンして、バックするときにも体はちっとも揺れないし、本屋さんの店先で立ち読みをするときにも足を一度も地面につかなかったらしい。

(重松清「くちぶえ番長」から)

- (1) ① あいつ とあるが、「ぼく」が聞いた「あいつ」のウワサとして、適切でないものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア お母さんと商店街の本屋にいた。
- イ カシの木の高い枝に登っていた。
- ウ 頭のとっぺんの髪の毛を結んでいた。
- エ 一輪車をこぐのがすごくうまかった。

- (2) ② 最初は信じなかった とあるが、なぜ信じなかったのか。その理由について説明した次の文の [ ] にあてはまる最も適切な言葉を、文章から十九字で探し、その初めと終わりの五字を書きなさい。

[ ] と思ったし、パパはいつもガキっぽいウンばかりついているから。

- (3) ③ [ ] にあてはまる、体の一部を表す最も適切な言葉を、漢字一字で書きなさい。

- (4) ④ [ ] には、その子が知らない子であることを表す言葉があてはまる。その言葉を、これより後の文章中から六字で書きぬきなさい。

- (5) この文章の表現について説明したものととして、最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同じ言葉のくり返しや呼びかけによって、「ぼく」と友だちのやりとりに緊張感を持たせ、リズム感をあたえている。
- イ 言葉の順をふつうとは逆にして、「ぼく」の心情を強調すること、父親と息子のやりとりを鮮やかに表現している。
- ウ 「ぼく」の心の声を、文末を名詞で終わりにする表現方法を用いて表し、家族の仲の良さを印象的にえがいている。
- エ 「くみたい」というたとえを効果的に用いて、「あいつ」の様子などをいきいきと親しみやすい表現でえがいている。

次の文章について、後の(1)～(5)の問いに答えなさい。

勉強するといいいことがあるのだが、それが何だか、おわかりだろうか。勉強するといちばいいいことは、知識が増えること以上に、頭が良くなるということなのだ。へア

「勉強すると頭が良くなる」ということは意外に見落とされてきているが、「なぜ勉強するのか」という問いへの①一つの端的な答えである。運動すると運動神経が良くなる。運動部に入って何年かやっていると、元はそんなに動きが鋭くなかった人でも、ある程度、体が動くようになる。それと似ている。勉強すると頭が良くなる。頭が良くなると同時に心のコントロールもうまくいくようになる、というのが大方の筋道だ。(中略)

勉強すると頭がおかしくなるかのような言説をまき散らす人がいるが、基本的にそういうことはない。へイ

勉強というものをすることによって、ある種の自制心という、メンタルコントロール(心の制御)の技術も学ぶことができる。そういう心の技がセットで付いてくるわけである。へウ

考えてみれば当たり前のことにすぎない。勉強するということの基本は、人の言うことを聴くことである。耳を傾けて我慢して聴くという心の構えが求められる。「おれが、おれが」という自己中心的独占的な態度を一度捨てる必要がある。「自分に理解できないことは全部価値がない」という、自分の好きか嫌いかの世界をすべて決めるといいう態度では何も学べないのだ。

先人たちの発見したことに対して耳を傾け、しっかりと聴くということが、学ぶということの基本だ。そうした②「学ぶ構え」ができている人は、ほかの人に対しての意識を持つこともできやすい。人の言葉を聴いている間は、自己中心的な態度をやめているということだからだ。

本を読むということも、同じく聴く構えを要求される。若者に対して一〇〇パーセント同意するのではないまでも、耳を傾け虚心坦懐に、つまり心をすっきりさせて、読むわけだ。もちろん反発もあるかもしれないが、まずは相手の言っていることを受け入れてみようという、「積極的に受動的な考え」を、勉強・読書を通じてつくり上げる。これが学ぶ構えの基本なのだ。

学ぶ構えの基本は、受動的であることに積極的な「積極的受動性」である。自己表現の意欲があるのは構わない。表現するためにいろいろ

ものを読んで、自分のものにしてそれで表現するのが、筋道なのだ。モーツァルトが音楽の技法・文法を修得して表現したように、である。

知識や技を吸収するときには、人の言っていることに耳を傾けるといいう素直な態度が必要である。素直であることが、学ぶという活動そのものの持っている本質なのだ。

もちろん反発しながら、ぶつかり合いながら学ぶというやり方もないわけではない。そのテキスト(教材)と格闘してこれを絶対に否定してやろうと思つてやる、ということもないわけではないが、基本的には学ぶという活動は「素直さ」を育てるものである。だから勉強すればするほど意固地になっていくとしたら、これは学び方がどこか狂っているのではないか。偏狭な考えになっていくようでは、学んでいる甲斐がないことになってしまう。

そういうわけで、勉強をすると素直に吸収する構えが技となる。これがすなわち、頭自体が良くなるということだ。だから「頭がいいから勉強ができる」とか、「頭が悪いから勉強ができない」などとよくいうが、そういう考えはあまり発展性のある考え方ではない。実際、「頭の良さ」はトレーニングによって明白に向上する。「頭」と私たちが思っているものは、もちろん情報の高速処理もあるが、おもに文脈をつける力を指していることが多い。その文脈をつけて理解する力というのは、やればやるほど伸びていくものなのだ。

勉強というものはそういう意味で、まず頭を良くするし、ある程度自制心をもって心をコントロールするということが大変役立つ。もちろん、その上に知識そのものの価値ということが乗っかってくる。

文脈をしっかりと捉える理解力の養成は、学問共通の効用である。

**A** 江戸時代の人がやっていた学問というものは、現在の最先端の学問とくらべると、ずいぶん遅れている。もしくは狭かった。**B**、それを真面目に勉強した、たとえば新井白石のような人の知性が濁っていたかという点、それなりに頭がすっきりしている。

だからこそ、彼の著書『西洋紀聞』にあるように、イタリア人宣教師・シドッチを訊問した際に、言語の壁を越えたやりとりが可能だった。たとえ、文化・宗教・母国語が異なっていたとしても、理解力のある者同士の間では、密度の高いコミュニケーションが成立するのである。

\* 端的にはっきりとしているさま。

\* 偏狭にせまいこと。  
(齋藤孝「教育力」から。一部省略)

① 一つの端的な答え とあるが、この言葉の指している内容を、文章中から十一字で書きぬきなさい。

(2) 次の一文は、文章中の「ア」「ウ」のどこに入るか。最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

これは、言ってみると人類の長年の知恵である。

(3) ②「学ぶ構え」とあるが、「学ぶ構え」を身につけるにはどうすることが必要だと筆者は述べているか。その内容を、文章中の言葉を使って、三十五字以上、四十字以内で書きなさい。(句読点を含む)。

ただし、「相手」「積極的」「受動的」という二つの言葉を用いること。

(4) 文章中の「A」と「B」にあてはまる言葉の組み合わせとして、最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A あるいは B なぜなら      イ A それでは B したがって  
ウ A たとえば B けれども      エ A ところが B ようするに

(5) この文章の内容に合っているものとして、最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 勉強するほどに意固地になったり、偏狭な考えになったりしないように、自分の好き嫌いを見極め、自己中心的に学ぶべきである。  
イ 文脈をつけて理解する力というのは、相手の言うことに反発したり、相手とぶつかり合ったりすることで自分のものになっていく。  
ウ 江戸時代の人の頭は、現代人よりも理解力がすぐれていたため、異なる国の人々とも言語を使わないやりとりが可能だった。  
エ 「頭の良さ」はトレーニングによって向上するので、勉強をすればするほど頭自体がよくなり、文脈をつける力もどんどん伸びていく。

三

国語の授業で次の古典を読み、グループで質問や感想を出し合いました。次の【I】・【II】について、後の(1)～(4)の間に答えなさい。

【I】 古典

(次の文章は、都の荒れ果てた様子を聞いた筆者が、自分の住まいである「仮の庵」でのくらしについて述べたものである。)

ただ仮の庵のみ、のどけくしておそれなし。程せばしと①いへども、夜臥す床あり、昼ゐる座あり。

(のどか 心配がない)

(ほど 程せばしと)

(座る場所もある)

一身をやどすに不足なし。かむなは小さき貝を好む。これ身知れるによりてなり。②みさごは荒磯に

(自分一人の身を置くのに十分だ)

(身のほどを知っているからである)

\*あらいそ

ある。すなはち、人をおそるるがゆゑなり。われまたかくのごとし。身を知り、世を知れば、願はず、

(これらと同じことである)

わしらず。ただしづかなるを望みとし、憂へなきをたのしみとす。

(細かいことを気にしない)

(なやまないこと)

(「方丈記」から)

\* かむな Ⅱ ヤドカリ。

\* みさご Ⅱ タカ科の鳥。

\* 荒磯 Ⅱ 波の荒い、岩石の多い海岸。

【Ⅱ】グループで出された質問や感想の一部



りく

筆者が、せまい家がいいと述べるのはなぜですか。



ゆい

この文章を読んで、筆者は、を望んでいるのだということがわかりました。

(1) 【Ⅰ】の①いへども の読み方を現代仮名遣いに直して、平仮名で書きなさい。

(2) 【Ⅰ】の②みさごは荒磯にゐるとあるが、その理由を、筆者はなぜだと述べているか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 静かな所が好きだから。      イ 仲間がたくさんいるから。

ウ 魚をとって食べるから。      エ 人間をおそれているから。

(3) 【Ⅱ】のりくさんの質問に対する答えとして、最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友人を招くのに適しているから。      イ 自分の身の丈に合っているから。

ウ 都から遠くはなれているから。      エ ささまざまな生き物があるから。

(4) 【Ⅱ】のゆいさんの感想のにあてはまる内容として、最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ひたすらおだやかで心配ごとのない、小さな庵でのくらし

イ 貧しい生活でも、人から尊敬されるような、山の庵でのくらし

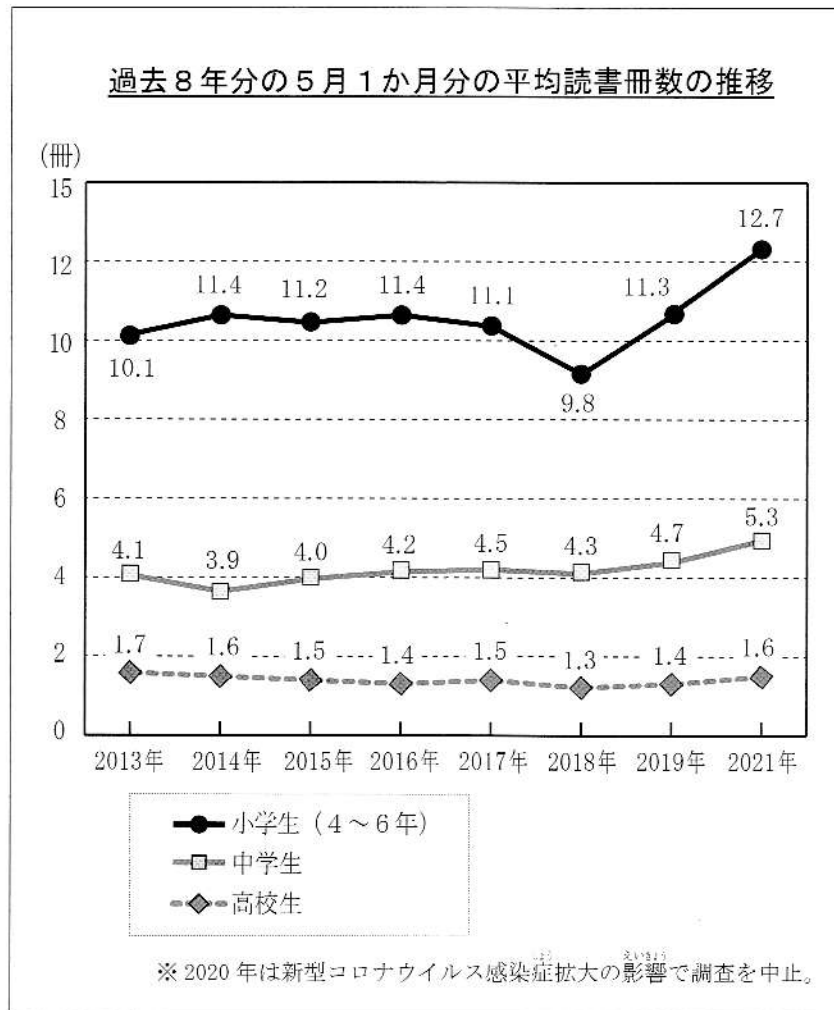
ウ 小さな生き物と交流し、人とあらしわらない、静かな庵でのくらし

エ 友人の健康を願いながら修行に専念する、海の近くの庵でのくらし

#### 四

中野さんのグループは、総合的な学習の時間に、読書について発表を行いました。次の【Ⅰ】・【Ⅱ】について、後の(1)～(4)の問いに答えなさい。

#### 【Ⅰ】資料



(2021年度全国学校図書館協議会「学校読書調査」より作成)

#### 【Ⅱ】読書についての生徒の発表

私は、一人っ子です。小学生までは家で一人過ごすことが多く退屈<sup>たいくつ</sup>でしたが、中学生になって、読書の楽しさに気づくと、①私の世界はみるみる広がりました。一冊の本があれば、どこにいても、いろいろな国やまだ見ぬ②世界へ旅することができるのです。資料を見ると、二〇二一年は、小学生は一月に十二冊以上も本を読んでいるようですが、高校生はとも少ないことが分かります。私は、高校生になっても読書を思う存分楽しみたいと思っています。

(中野さん)



今から、私の読書体験について発表します。私の心に残っている本は、齋藤隆介さいとうりゅうすけさんの書いた『花さき山』です。物語の主人公は「あや」という女の子です。私がこの本と出会ったのは、小学生の時です。担任の先生がクラスみんなに読んでくれたのです。私はとても感動し、家に帰ると、さっそく母にこの本を買ってもらいました。そして、何度も何度も読みました。クラスのみんなもこの本が大好きで、みんなで劇にして演じたことも忘れられません。『花さき山』は、私にとって大切な本です。みなさんにも心に残る読書体験がありますか。これで、私の発表を終わります。

(山田さん)

(1) 【Ⅱ】の ① 私の世界はみるみる広まりました。を文節にわけるといくつになるか。数字で書きなさい。

(2) 【Ⅱ】の ② 世界は「音読み十音読み」の熟語である。これと同じく「音読み十音読み」の熟語を、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本屋
- イ 場所
- ウ 出口
- エ 田園

(3) 【Ⅱ】の ③ くれたを尊敬語に直して、平仮名五字で書きなさい。

(4) 【Ⅰ】・【Ⅱ】を参考にして、「読書の楽しさ」についてのあなたの考えを書きなさい。ただし、以下の条件に従うこと。

- 1 百字以上、百五十文字以内で書くこと。(句読点を含む。)
- 2 二段落構成とし、第一段落には、【Ⅰ】の資料から読み取れることを書き、第二段落には、「読書の楽しさ」についてのあなたの考えを書くこと。なお、数字を使う場合は、99.9冊のように書くこと。
- 3 正しい原稿用紙の使い方をすること。ただし、題名と氏名は書かないこと。また、{ } や || 等の記号(符号)を用いた訂正ていせいもしないこと。
- 4 文体は、敬体「です・ます」で書くこと。

## 五

次の(1)～(3)の問いに答えなさい。

(1) 次の①～⑥の——線部について、片仮名の部分を漢字で、漢字の部分の読みを平仮名で書きなさい。(漢字は楷書<sup>かいしよ</sup>で書くこと。)

① 新しいザンシ<sup>ザンシ</sup>を読む。

② キソク<sup>キソク</sup>正しい生活をする。

③ コップに水<sup>ミヅ</sup>をミ<sup>ミ</sup>たす。

④ 警備<sup>けいび</sup>を嚴重にする。

⑤ 大陸<sup>たいりく</sup>を縦断<sup>じゆうたん</sup>する。

⑥ 運命<sup>うんめい</sup>に身<sup>み</sup>を委<sup>まか</sup>ねる。

(2) 次の漢字の→で示した部分は、正しい筆順で書くとき何画目か。数字で書きなさい。

→有

(3) 「失敗しないように前もって用意しておくこと」という意味のことわざとして、最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 石の上にも三年

イ 口は災い<sup>わざ</sup>のもと

ウ あぶはちとらず

エ 転ばぬ先のつえ